

メソアメリカにおける太鼓腹の石彫

伊 藤 伸 幸

1. はじめに

太鼓腹の石彫はメソアメリカ南東部太平洋側における代表的な石彫である。スペイン語表記では Barrigon, Obeso, Gordinflón, Panzudo、英語では Potbelly などと表記され、腹部が大きな石彫を指し示している。また、太鼓腹の石彫はメソアメリカの広域にみられる。

メソアメリカ全域をみると、ゲレロ州からメキシコ中央部を通りメキシコ湾岸地方にかけて、太鼓腹石彫の出土遺跡の北限がある。また、南はユカタン半島にはほとんど事例がなく、マヤ中部低地からメソアメリカ南東部太平洋側にかけて南限がある。しかし、その大半はメソアメリカ南東部太平洋側に集中している。また、この地方では 1 遺跡での出土石彫数が多いのが特徴といえる。メキシコ チアパス州太平洋側のティルテペック遺跡、グアテマラ太平洋側のタカリク・アバフ遺跡、モンテ・アルト遺跡、グアテマラ高地のカミナルフユ遺跡などでは複数の太鼓腹石彫が出土している。

太鼓腹の石彫に関する先行研究については、以前検討した（伊藤 2018）。本稿では、先行研究を繰り返し記述することは避けて、エルサルバドル以外のメソアメリカで出土した太鼓腹石彫を考察する。

2. メソアメリカの太鼓腹の石彫

メソアメリカにおいて、太鼓腹の石彫が出土している遺跡をみると、グアテマラに集中している（図 1）。一方、ガーンジーはモンテ・アルト様式の太鼓腹石彫の頭部、特に顔の部分を持つ場合にも太鼓腹石彫としているために、実際には太鼓腹を持っていないにも関わらず、太鼓腹の石彫と認めている事例もある（Guernsey, 2012）。このため、ガーンジーが太鼓腹としている石彫のうち、太鼓腹が表現されていない人頭像、タテ杭付人頭像、横位ホゾ付き石彫は本稿では扱わない（伊藤 1999）。本稿では、本来の太鼓腹石彫の特徴である腹が出ている胴部を持つ石彫を太鼓腹の石彫とする（Cassier y Ichon, 1981; Chinchilla, 2001–2002; Craig, 2005; Coe, 1965; Delgadillo Torres y Santana Sandoval, 1989; Dutton and Hobbs, 1943; Fialko, 2005; Girard, 1969; Graham, 1981; Guernsey, 2012; Jones and Satterthwaite, 1982; Love, 2010; Lowe, et al., 1982; Lothrop, 1926; Martínez Donjuán, 2010; Navarrete, 1967, 1977, 1978, 1984, 1996; Navarrete y

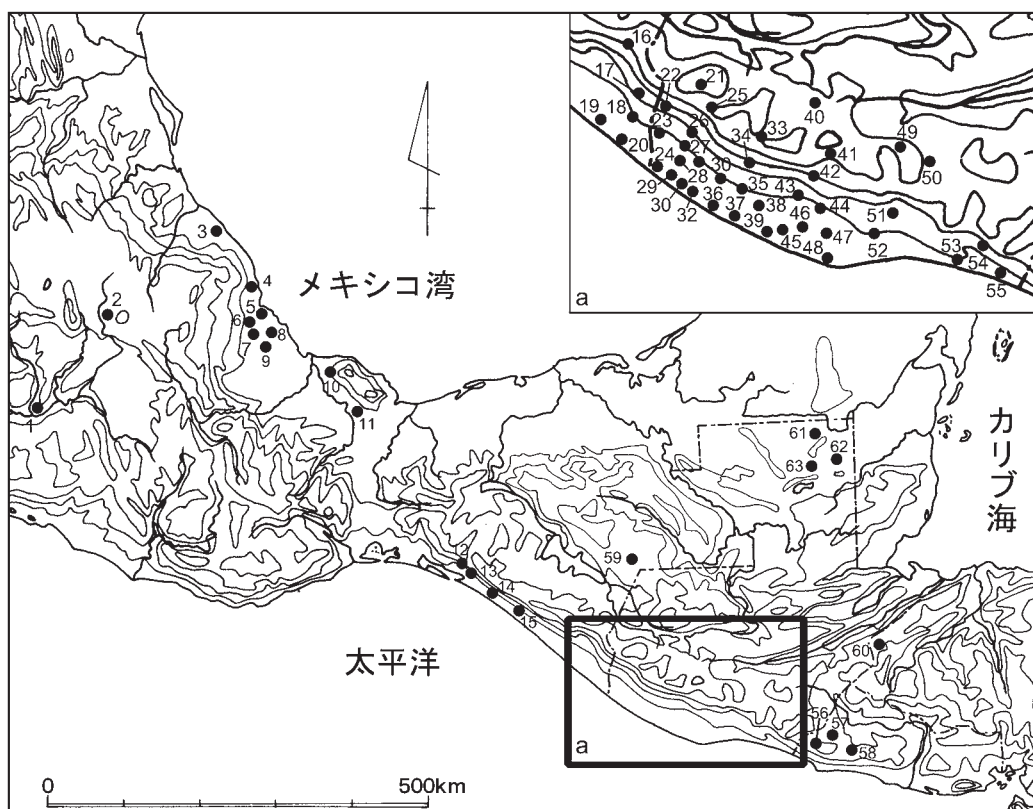


図1 メソアメリカにおいて太鼓腹石彫が出土した遺跡

1. テオパンティクアニトラン、2. ソチテカトル、3. アパリシオ、4. アンティグア、5. ベラクルス市、6. マニロ・ファビオ・アルタミラノ、7. ボルパレダス、8. セロ・デ・ラス・メサス、9. ノビロア、10. トレス・サポテス、11. サンタ・ロサ・ロマ・ラルガ、12. アリアガ、13. ティルテベック、14. セロ・ベルナル、15. ビヒヒアパン、16. ラ・カンパナ、17. カカオアタン、18. トウクストラ・チコ、19. オブレゴン、20. イサパ、21. タフムルコ、22. マラカタン、23. エル・レティロ、24. ウフシュテ、25. サン・ペドロ・サカテベケス、26. エル・パライソ、27. タカリク・アバフ、28. アルヘリア、29. フィンカ・カタルニャ、30. サリナ・デ・イシュタン、31. サン・セバスティアン、32. シン・カベサス、33. フィンカ・アラビア、34. チョコラ、35. サン・ホセ・エル・イドロ、36. ソロラ、37. ティキサテ、38. ボナンバック、39. サン・アントニオ、40. ウタトラン、41. アグア・エスコンディダ、42. フィンカ・モカ、43. ビルバオ、44. パンタレオン、45. フィンカ・ヌエバ、46. エル・バルサモ、47. モンテ・アルト、48. ヒラルダ、49. サン・ファン・サカテベケス、50. カミナルフコ、51. コンセプシオン、52. ロス・セリトス（南）、53. チキムリヤ、54. パサコ、55. ラ・ヌエバ、56. サンタ・レティシア、57. チャルチュアパ、58. コアテベケ、59. フンカナ、60. コパン、61. サン・バルトロ、62. チャンチチII、63. ティカル

Hernández, 2000; Orrego C., 1990; Parsons, 1967, 1969, 1981, 1986; Parson & Jenson, 1965; Popenoe de Hatch, 1989; Richardson, 1940; Rodas, 1993; Schieber de L. y Orrego C, 2010; Scott, 1980, 1988; Shook, 1950, s.f.; Stirling, 1943; Tejeda, 1947)。

エルサルバドル以外のメソアメリカでは、合計すると57遺跡133基の太鼓腹石彫がみられる(図2～4、表1、写真1～10)。

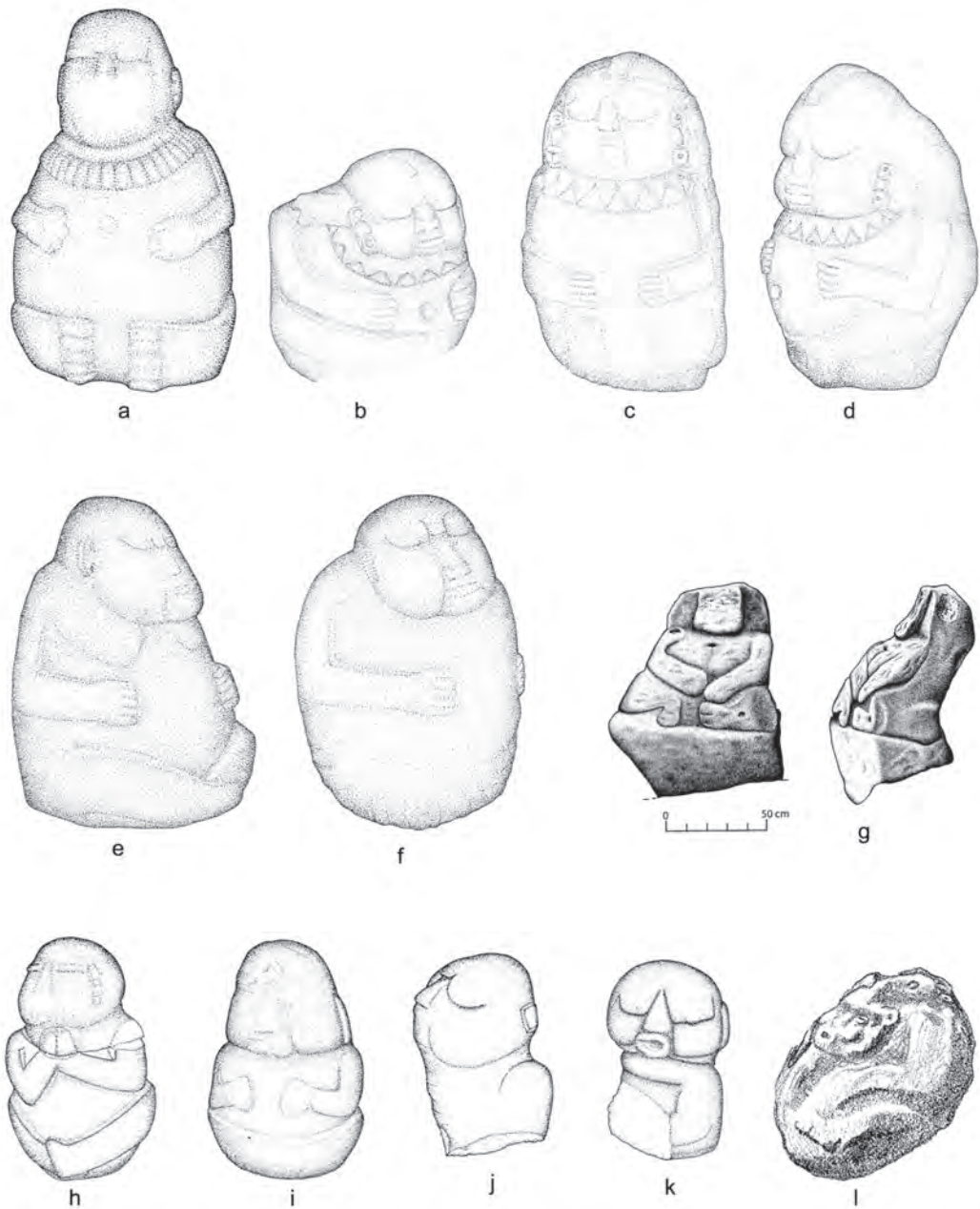


図2 メソアメリカ南東部太平洋側で出土した太鼓腹石彫(1)

a. ウタトラン遺跡1号記念物、b. コンセプション遺跡3号記念物、c. ビルバオ遺跡46号記念物、d. 同遺跡47号記念物、e. ヒラルダ遺跡1号記念物、f. 同遺跡2号記念物、g. タカリク・アバフ遺跡58号記念物、h. サン・アントニオ遺跡1号記念物、i. ロス・セリトス遺跡(南)3号記念物、j. ボナンパック遺跡1号記念物、k. ソロラ遺跡2号記念物、l. タフムルコ遺跡石彫L

(a-f, h-k. Rodas, 1993; g. Schieber de L. and Orrego C., 2010; l. Dutton & Hubbs, 1943を改変)



図3 メソアメリカ南東部太平洋側で出土した太鼓腹石彫(2)

a. ティルテベック遺跡1号記念物、b. 同遺跡24号記念物、c. 同遺跡26号記念物、d. 同遺跡27号記念物、e. 同遺跡28号記念物、f. 同遺跡33号記念物、g. 同遺跡34号記念物、h. ラ・ペルセベランシア遺跡、i. ソロマ遺跡、j. ラ・カンパナ遺跡

(a-h. Navarrete, 2000; i. Navarrete, 1984; j. Navarrete, 1978を改変)

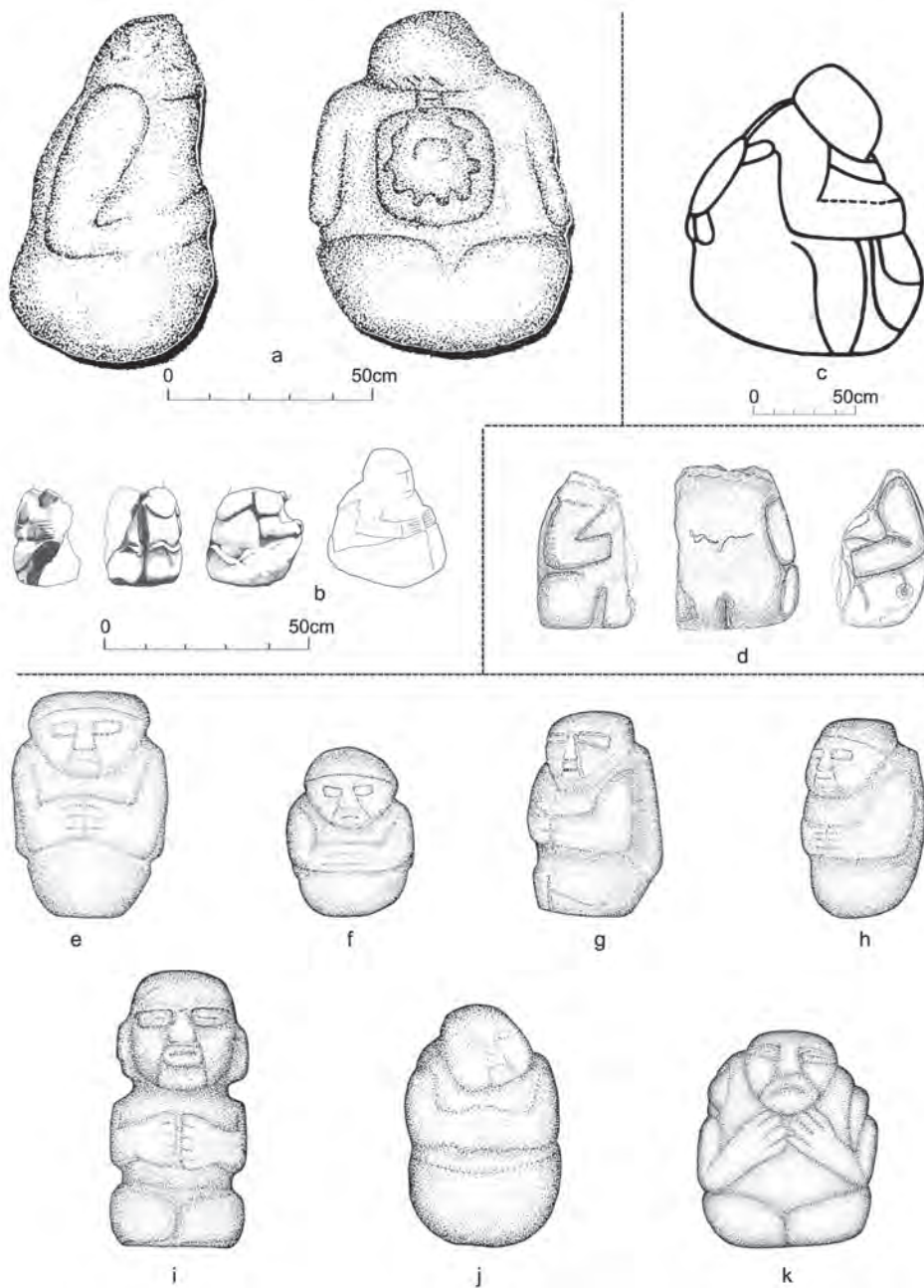


図4 マヤ中部低地出土太鼓腹石彫とメソアメリカ南東部太平洋側の小型太鼓腹石彫

a. ティカル遺跡167号記念物、b. 同遺跡82号記念物、c. サン・バルトロ遺跡、d. チャンチチII遺跡、e. チキムリヤ出土1d石偶、f. 同1e石偶、g. 同1f石偶、h. 同1c石偶、i. タカリク・アバフ周辺出土1号石偶、j. ラ・ブランカ出土1a石偶、k. 出土地不詳1b石偶

(a. Rodas, 1993; b. Jones and Satterthwaite, 1982; c. Craig, 2005; d. Fialko, 2005; e-k. Rodas, 1993を改変)

表1 メソアメリカで出土した太鼓腹石彫

遺 跡	石 彫	時 期	高さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	頭彫り	目	耳彫り	口	胸・手の 位置	手の指	臍	足の姿勢	足の指	装身具	図・写真	備 考
メキシコ中央部～ゲレロ州																	
テオバンティクアニトラ	—	先古典中期?	140	90	66	×	—	×	—	膝	—	×	正座?	×	×	裨	Martínez D., 2010: fig. 3.22
ソナテカル	女性石彫	先古典期 ～後期	150	160	160	○	虚ろ	×	楕円	腹	5	×	投げ出し(下)	×	胸飾り/乳△	写真6f	
	石彫	先古典期 ～後期	150	160	160	×	虚ろ	×	楕円	腹	—	×	投げ出し(下)	×	△	写真6k	
メキシコ湾岸																	
アパシシオ	—	—	135	87	80	○	—	複雑	△	後ろ手	5	×	体育座り	—	×	—	写真10k
アンティギア	—	—	73.5	—	—	○	○	円形	楕円	—	—	—	—	—	—	—	写真8i
ベラクルス市	—	—	30	—	—	—	—	—	—	腹	4	×	投げ出し	—	×	—	Scott, 1980: fig. 3
ベラクルス市(バルアルテ)	—	—	—	—	—	○	閉	円形	○	腹・肘?	4-5	×	正座	—	首、上腕?、手首	—	写真4c
マンニロ・アパビオ・アルタミラノ	—	後古典期前期	159	76	57	×	隆起	—	○	腹	5	×	正座	—	胸、手首、裨	—	写真4b
ボルバレダス	—	古典期前期	76	60	54	○	○	円形	○	腹	5	×	—	—	胸—	—	写真8h
セロ・デ・ラス・メサス	—	古典期前期	120	94	70	○	虚ろ	×	▽	側腹	—	×	—	—	鼻、裨?	—	写真7g
ノビロア	—	古典期前期	93	50	44	○	○	×	楕円	腹	4?	—	—	—	髭、裨?	—	写真8g
トレス・サボテス	—	—	66	33	—	×	—	—	—	腹	—	—	—	—	—	—	写真8c
メソアメリカ南東部太平洋側 チアパス州																	
アラガ	—	先古典後期?	64.5	60.2	47.8	○	虚ろ	×	○	腹	5	×	正座	—	首	—	写真7i
ティルテペック	1号記念物	先古典後期?	156	—	—	○	閉	—	円形	膝	—	—	正座・体育	—	—	—	図3a
	23号記念物	先古典後期?	74.2	52.5	38.1	×	垂脛	×	円形	腹	—	×	—	×	×	—	写真3b
	24号記念物	先古典後期?	—	—	—	○	虚ろ	×	○	腹	×	×	投げ出し	—	×	—	図3b
	25号記念物	先古典後期?	101	55	35	○	隆起	×	円形	腹	×	×	体育座り	×	×	—	写真3g
	26号記念物	先古典後期?	—	—	—	○	垂脛	×	○	腹	×	—	体育座り	×	裨	—	図3c
	27号記念物	先古典後期?	—	—	—	○	垂脛	×	○	腹	5	×	体育座り	×	裨	—	図3d
	28号記念物	先古典後期?	—	—	—	○	垂脛	×	○	腹	×	×	体育座り	×	裨	—	図3e
	33号記念物	先古典後期?	—	—	—	○	垂脛	×	○	腹	×	×	体育座り	×	裨	—	図3f
	34号記念物	先古典後期?	—	—	—	○	垂脛	×	○	腹	×	×	体育座り	×	裨	—	図3g
ラ・ベルセランシヤ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	腹	×	×	投げ出し	×	首(四)	—	図3h
セロ・ベルナル	—	—	—	—	—	虚ろ	?	円形	腹	?	?	?	正座?	?	×	?	—
ビビヒアパン	—	—	34.8	20	24.5	×	虚ろ	×	—	口	×	×	体育座り	×	×	—	Guernsey, 2012: fig. 4.50b
ラ・カンパナ	—	古典期後期 ～後古典期	42	—	—	×	虚ろ	×	楕円	腹	5	×	体育座り	—	×	—	写真3j
カカオアタン	—	—	67	28	30	×	虚ろ	×	○	側腹	×	?	体育座り	×	×	—	写真6e
トウクストラ・チコ	—	—	75	56	53	—	—	×	—	腹	—	—	体育座り	×	—	—	写真9j
オブレゴン	—	—	56.3	41.5	35.5	○?	—	—	—	胸	—	×	体育座り	×	—	—	写真10i
イサバ	70号記念物	先古典後期	80	60	—	×	○	×	○	腹・胸	4?	×	投げ出し	4-5	×	—	Lowe, et al., 1982: fig. 6.15
—	—	—	34.3	15.3	24.2	×	垂脛	×	円形	腹	×	×	投げ出し	×	×	—	写真3c
トナラ (Casa de Cultura)	—	—	80.5	53	57.5	○	虚ろ	×	○	下腹	×	×	投げ出し	×	×	—	写真7f
海岸部	—	—	69	53.5	40	×	—	×	○	下腹	—	×	体育座り	×	×	—	写真5g
海岸部	—	—	49.4	32	38	×	虚ろ	×	○	膝	—	×	胡坐	×	×	—	写真6b
ランカナ	—	—	48.8	28	25	×	○	×	○	腹・胸	5	×	体育座り	×	×	—	写真4h 赤色顔料付着
グアテマラ																	
タフムルコ	石彫 L	—	—	—	—	×	○	×	○	腹	×	×	投げ出し	×	×	—	図2l
マラクタン	—	—	59	22	24	×	隆起	×	▽	腹	5	×	立膝立	—	首(髯)	—	写真1l
エル・レティロ	—	—	87	57	76	×	虚ろ	×	○	胸・腹	5?	×	投げ出し/正座	—	×	—	写真6f
ウフシェテ	2号石彫	—	—	—	—	—	—	—	—	腹	4?	×	○	—	—	—	Love, 2010: fig. 7.21
ウフシェテ	3号石彫	—	—	—	—	×	虚ろ	×	○	側腹	×	×	?	—	×	—	Love, 2010: fig. 7.21
ソロマ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	腹	4	—	胡坐(左前)	×	—	—	図3i
サン・ベドロ・サカテペケス	—	～現代	—	—	—	○	○	×	○	腹	4?	×	投げ出し	×	×	—	写真5a Shook, s.f. 3880
エル・バリソ	—	～現代	—	—	—	×	隆起	×	○	腹・胸	4-5	×	投げ出し(下)	×	×	—	写真4j Shook, s.f. 4972
タカリク・アバフ	2号記念物	—	163	93	69	×	×	×	×	下腹	5	×	胡坐	×	×	—	写真9b
	3号記念物	—	117	83	65	×	虚ろ	×	○	腹	4-5?	×	胡坐(左前)	×	首(広)	—	写真6a
	8号記念物	—	31	38	22	—	—	—	—	下腹	4?	×	—	×	—	—	写真8d
	33号記念物	—	45	—	—	—	—	—	—	腹	○?	×	立位	—	—	—	写真9g Shook, s.f. 3773
	40号記念物	—	140	95	67	×	○	×	○	腹	—	×	胡坐(右前)	—	×	—	写真5b
	41号記念物	—	63	47	60	×	垂脛	—	○	腹	4	×	×	×	×	—	—
	46号記念物	—	61	43	42	—	—	—	—	下腹	—	×	胡坐(左前)	×	—	—	Guernsey, 2012: fig. 4.16b
	58号記念物	—	—	—	—	—	—	—	—	下腹	×	×	投げ出し/胡座	—	—	—	図2g
	69号記念物	先古典後期	129	95	105	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	写真8b
	94号記念物	先古典後期	147	100	112	×	垂脛?	×	○	側腹	5	×	胡座(右前)	—	×	×	写真2a
	100号記念物	先古典後期	84	48	57	×	×	×	×	腹	左4右5	×	—	—	首(広)	—	写真4d
	107号記念物	先古典後期	77	53	46	×	垂脛	×	—	腹	4	×	—	—	×	—	写真2b
	109号記念物	先古典後期	73	55	36	×	×	×	×	側腹	4	×	胡坐?	—	首(広)	—	写真4e
	113号記念物?	先古典後期	88	40	43	×	×	×	×	腹	—	—	—	—	×	—	写真10h
	石偶 1	—	18.8	9	?	×	○	×	○	腹	5	×	正座?	—	×	—	図4i
	アルヘリア	—	—	—	—	—	垂脛	—	▽	足上	×	×	×	×	胸輪	—	写真3c Shook, s.f. 4949
フィンカ・カタリニヤ	—	—	—	—	—	○	隆起	×	○	腹・首	5	×	立位	—	首	—	写真8f Shook, s.f. 5115
サン・セバスティアン	3号記念物	—	75	41	33	×	○	×	○	腹	5	×	座位	×	×	—	写真5e
	5号記念物	—	87	60	60	×	隆起	×	○	—	—	×	—	—	×	—	写真3i
	6号記念物	—	77.5	36	25	×	垂脛	×	—	側腹	×	×	立位?	—	×	—	写真2h
シン・カベサス	3号記念物	—	42	41	53	—	—	—	—	腹	5	×	胡座(右前)	—	×	—	写真9a
フィンカ・アラビア	—	～現代	52	—	26	×	虚ろ	×	○	腹	5	×	座位?	—	×	—	写真6c キチエ
チョロラ	—	—	—	—	—	×	虚ろ	×	○	胸・腹	4-5	×	—	—	×	—	—
サン・ホセ・エル・イドロ	—	—	77	39.5	41	×	×	×	×	—	×	×	座位?	—	×	—	写真5f
ソロラ	1号記念物	—	85	70	51	×	垂脛	×	○	腹	5	×	×	×	×	—	写真2d
	2号記念物	—	77	37	—	×	垂脛	×	○	腹?	—	—	—	—	×	—	図2k
	3号記念物	—	98	62	44	×	垂脛	×	○	腹	5	—	円盤	×	×	×	写真2e
ティキシサテ	—	—	77	44.5	54	—	—	—	—	胸・腹	左4右5	—	正座?	×	×	—	写真9c

遺 跡	石 形	時 期	高さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	頭飾り	耳飾り	口	腕・手の 位置	手の指	臍	足の姿勢	足の指	装身具	図・写真	備 考	
ボナンパック	1号記念物		24.5	—	—	×	垂脛	×	—	—	—	—	×	×	図3j		
サン・アントニオ	1号記念物		64	42	35	×	×	—	胸・腹	×	×	胡座(左前)	×	×	図3h		
ウタトラン	—		106	—	—	×	垂脛 ?	×	—	腹	4-5	×	投げ出し	5?	首(髷)	図2a	
アダア・エスコンディダ	1号記念物		65	—	—	—	—	—	膝	—	×	体育座り?	×	首、スカート?	写真10a	Shook, s.f. 4021	
フィンカ・モカ	—		—	—	—	○	×	×	○	後ろ手	—	—	立位	×	写真5i	Shook, s.f. 4027	
ビルバオ	46号記念物	古典期後期?	128	88	—	×	垂脛	凹形	○	腹	5	×	座位	—	首(髷)	図2c	
	47号記念物	古典期後期?	110	90	—	×	垂脛	凹形	○	腹	5	×	凹盤	—	首(髷)	図2d	
	58号記念物	古典期後期	120	64	70	×	垂脛	凹形	○	腹	5	×	胡坐(右前)	×	×	写真2f	
パンタレオン	—		29.5	20	21	—	—	—	—	腹	4	×	胡座(右前)	—	—	写真9f	
フィンカ・ヌエバ	1号記念物		61.5	37	38.5	×	垂脛	×	○	腹	5	×	×	×	×	写真2g	
エル・バルサモ	1号記念物		72	53	59	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	写真7h	
ラ・デモクラシア	—		50	—	—	×	垂脛	凹形	○	腹	5	凹	胡座(右前)	—	首(髷)	写真1i	
モンテ・アルト	4号記念物	先古典期後期	153	185	174	×	垂脛	凹形	○	腹	5	×	投げ出し	×	×	写真3b	
	5号記念物	先古典期後期	184	216	225	×	垂脛	×	○	腹	5	×	投げ出し	×	×	写真2b	
	6号記念物	先古典期後期	124	135	149	×	×	凹形	—	腹	5	×	体育座り	×	首(広)胸	写真8a	
	9号記念物	先古典期後期	164	127	103	×	×	×	○	腹	5	×	投げ出し	×	×	写真5c	
	11号記念物	先古典期後期	179	164	179	×	垂脛	凹形	○	腹	5	×	投げ出し	×	胸(凹)	写真3a	
	13号記念物		55	40	43	×	×	×	×	腹	×	×	投げ出し	×	—	写真4k	
ヒラルダ	1号記念物		104	87	92	×	垂脛	—	○	腹	5	×	胡坐(右前)	×	×	図2e	
	2号記念物		170	90	80	×	垂脛	×	○	腹	5	×	×	×	×	図2f	
サン・ファン・サカタベケス	—		45	27.5	17.5	×	垂脛	凹形	凹形	腹	5	○	胡座(左前)	×	首(髷)	写真1h	
カミナルフユ	3号記念物	〜古典期後期	112	72	62	×	垂脛	凹形?	—	腹	4	×	投げ出し	5	首(髷)	写真1c	
	4号記念物	〜古典期後期	109	66	60	×	×	×	○	腹	5	×	投げ出し	5	×	写真4a	
	5号記念物	〜古典期後期	97	67	62	—	虚ろ	×	○	腹	—	—	投げ出し	○?	首(広)	写真7b	
	6号記念物		100	61	60	—	垂脛	凹形?	○	腹	5	凹盤	投げ出し	5	首(髷)	写真1d	
	7号記念物		76	70	71	—	—	—	—	腹	5	凹盤	投げ出し 5本	首(髷)	写真10f		
	8号記念物		105	75	65	×	垂脛	—	—	腹	—	×	投げ出し	—	首(髷)	写真1a	
	9号記念物		68	48	42	—	虚ろ	×	○	×	×	×	×	首(凹)	写真7c	トレボル地区	
	11号記念物		67	77	76	—	—	—	—	腹	—	×	—	—	貫頭衣?杖?	写真10b	
	15号記念物		94	73	80	○	虚ろ	×	○	腹	×	×	投げ出し?	—	貫頭衣、腕、手首、杖、足	写真7a	
	39号記念物		43	44	49	—	—	—	—	腹	5	×	投げ出し	×	腕?	写真10e	
	41号記念物		67	68	70	—	—	—	—	腹	4	凹盤	投げ出し	4	首(髷)	写真10c	
	57号記念物		37.5	27.5	21.5	○	垂脛	凹形	凹形	膝	5	×	胡坐(左前)	×	首(髷)	写真1e	
	58号記念物		39.5	27	16	○	垂脛	凹形	凹形	膝	○	×	胡坐(左前)	×	首(髷)	写真1f	
	59号記念物		26	28	28	—	—	—	—	膝	4?	×	胡坐(左前)	×	—	写真9d	
	60号記念物		58	43	32	○	虚ろ	×	○	膝	×	×	胡座?	—	首?	写真7d	
	66号記念物		108	80	78	×	虚ろ	×	○	腹	○	×	投げ出し	×	首(髷)	写真7c	
	石偶 a		19	12	12	×	垂脛	×	○	腹	4	×	×	×	首(髷)	写真1k	
	石偶 b		19	13	11	×	垂脛	凹形	○	腹	4	×	×	×	首(髷)	写真1j	
	石偶 c		35	23	14	×	垂脛	凹形	○	腹	○	凹	胡坐(左前)	×	首(髷)	写真1g	
	石偶 d		20	17	13	×	—	—	—	腹	4	×	胡座?	×	—	写真9c	ランディバル地区
	石偶 e		18.5	12	10	×	虚ろ?	×	×	腹	×	×	座位	×	×	写真6h	
	—		26	15	11	×	隆起	×	×	胸・腹	×	×	—	×	—	写真6i	
	—	先古典期後期	47	37	17	×	○	×	○	膝	5	穴	胡坐(右前)	×	×	写真5h	
	—		19	13	14	—	—	—	—	腹	3	×	—	—	—	写真8c	
	—		—	—	—	—	—	—	—	腹	5	×	投げ出し	4	貫頭衣? 凹盤?	写真10g	Shook, s.f. 4539
	—		27	—	—	×	垂脛	×	○	腹	4?	×	胡坐(右前)	×	首(髷)	写真1m	Shook, s.f. 4486
コンセプション	1号記念物		100	88	88	×	垂脛	×	○	腹	5	×	胡座(右前)	×	×	写真2c	Shook, s.f. 5465
	2号記念物		75	60	—	×	○	×	○	腹	5	—	—	×	×	写真5d	Shook, s.f. 5463
	3号記念物		90	—	—	○	垂脛	○	○	腹	5	凹盤	座位?	×	首(髷)	図2b	
ロス・セリトス (南)	3号記念物		80	53	—	×	×	×	○	腹	×	×	×	×	×	図3i	
ロス・セリトス	—		5.4	4.3	3	×	隆起	×	○	腹	3	×	×	×	×	写真4f	Shook, s.f. 5459
ロス・セリトス	—		—	—	—	○	隆起	×	○	腹	3	×	×	×	×	写真4g	Shook, s.f. 5460
チキムリヤ	石偶 1a-f		—	—	—	×	隆起	×	○	腹	3-4	×	×	×	×	図4e-h	
バサコ	1号記念物		98	51	32	×	隆起	×	凹	腹	4-5	凹盤	—	×	首(髷)、マント ? 褲?	写真3f	
	2号記念物		55	40	30	—	○	×	凹形	腹	5	凹盤	胡座(左前)	×	×	写真3d	
	3号記念物		56	39	35	—	—	—	—	腹	4	凹盤	胡坐(右前)	×	—	写真9h	
ラ・ヌエバ	1号記念物	古典期中期 〜後期	54	27.5	41	—	—	—	—	腹	—	×	体育座り	4	×	写真9k	
	—		6.4	4	—	×	○	×	○	腹	×	×	×	×	×	図4j	
オリンポ	—		28	16	24	×	○	×	○	腹	4	×	投げ出し	×	×	写真10j	
サカタベケス	—		114	75	73	×	垂脛	×	○	腹・胸	5	×	投げ出し	×	首(髷)	写真1b	
サン・アントニオ	—		—	—	—	×	隆起	×	○	腹	4?	×	投げ出し	×	×	—	Guernsey, 2012: fig. 4.35a
	—		—	—	—	×	隆起	×	○	腹	×	×	座位	×	×	—	Guernsey, 2012: fig. 4.35b
	—		—	—	—	×	隆起	×	○	腹	×	×	座位	×	首(広)	—	Guernsey, 2012: fig. 4.35c
ボボル・ブフ博物館所蔵	—		—	—	—	○	隆起	×	○	腹	5	×	立位?	×	首(髷)、褲	—	Guernsey, 2012: fig. 4.37a
レタウレ博物館所蔵	—		32	21	20	×	垂脛	×	凹形	腹	—	×	—	×	×	写真4i	
出土地不明	石偶 1b		8.3	6.5	—	×	○	×	○	胸	4	×	正座?	×	×	図4k	
出土地不明	—		—	—	—	○	垂脛	凹形	○	腹	4	×	—	—	首(髷)	写真1n	
出土地不明	—		—	—	—	×	虚ろ	凹形?	○	後ろ手	×	×	正座?	×	×	写真6d	
マヤ中部低地 グアテマラ																	
サン・バルトロ	石彫	古典期後期	120	50	100	—	—	—	—	腹	—	×	×	×	首(広)?	図4c	
チャンチチ II	2 基	先古典期 〜古典期前期	—	—	—	—	—	—	—	腹	—	×	体育座り?	×	×	図4d	
ティカル	82号記念物	先古典期後期	—	—	—	—	—	—	—	腹	—	×	×	×	×	図4b	
	167号記念物		70	—	—	×	—	—	—	—	—	—	—	—	首	図4a	
ホンジュラス																	
コパン	—	古典期後期	122	—	—	—	—	—	腹	4 ?	×	×	×	×	首(髷)、マント×	写真10d 4号石脚上	

(1) メキシコ中央部～ゲレロ州

メキシコ中央部からゲレロ州にかけての地域では、2 遺跡 3 基の太鼓腹石彫がみられる。

メキシコ中央部では、ソチテカトル遺跡から出土している。先古典期前期から後古典期まで続く都市遺跡である。山の上の遺跡中心部から下った山の麓で道路工事に太鼓腹石彫 2 基が出土した (図 5、写真 6 j, k)。出土した地点近辺からは、先古典期後期 (テショロクテソキパン期: 紀元前 500～200 年) の土器が出土している (Delgadillo y Santana, 1989)。

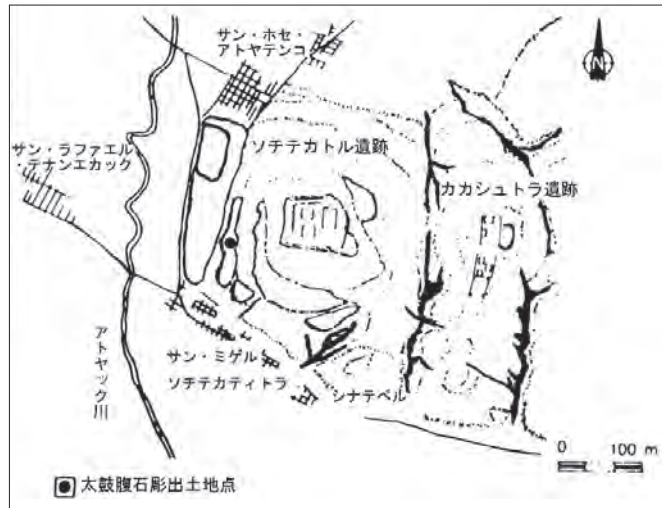


図5 ソチテカトル遺跡太鼓腹石彫出土地点図
(Delgadillo y Santana, 1989 を改変)

ゲレロ州では、テオパンティクアニトラン遺跡の北部分で太鼓腹石彫 1 基が出土している。しかし、出土状況などは不明である。この遺跡では、先古典期前期から後古典期までの考古資料があるが、最盛期は紀元前 1000～700 年とされる (Martinez, 2010)。

(2) メキシコ湾岸地方

メキシコ湾岸地方では、6 遺跡 9 基が出土している。

出土状況が報告されている太鼓腹石彫は、3 遺跡 3 基ある。セロ・デ・ラス・メサス遺跡では、2 号広場の中ほどで 5 号記念物が出土した (Stirling, 1943)。所属する時期等については不明である。ポルバレダス遺跡では太鼓腹石彫 1 基 (写真 8 h) が出土している。この遺跡で出土した土器はほとんどが古典期 (レモハダス上層: 紀元後 300～900 年) とされる (Scott, 1980)。トレス・サポテス遺跡では、建造物の頂部で太鼓腹石彫 1 基が出土している (写真 8 c, Stirling, 1943)。所属する時期等については不明である。

一方、出土遺跡のみが判明している太鼓腹石彫は、アパリシオ遺跡 1 基 (写真 10 k)、マニロ・ファビオ・アルタムラノ遺跡 1 基 (写真 4 b)、ノピロア遺跡 1 基 (写真 8 g) で、3 遺跡 3 基の石彫が相当する。一方、ベラクルス大学人類学博物館 1 基 (Scott, 1980, fig. 3)、ベラクルス市内広場 1 基 (写真 4 c)、アンティグア 1 基 (写真 8 i) の合計 3 基は出土状況などは不明である。

（３）メソアメリカ南東部太平洋側：メキシコ チアパス州

メソアメリカ南東部太平洋側のうち、メキシコ チアパス州では9遺跡17基が出土している。太鼓腹石彫の出土状況が分かる遺跡は、4遺跡8基がある。

ティルテペック遺跡では、第4建造物群の最大の建造物の南正面から26～28記念物が出土した（図3c, d, e, 6）。また、同群では並行する建造物の近くから1号記念物が出土している（図3a）。セロ・デ・ラ・カンパナ遺跡出土の石彫は、山のふもとの水路建設に際して出土した（図3j）。出土土器は古典期後期から後古典期前期までである（Navarrete, 1978）。イサパ遺跡では、130b 建造物で、70号記念物が90号祭壇と共に出土した。太鼓腹石彫の前に祭壇があった。先古典期後期とされる（Lowe, et al., 1982）。フンカナ洞くつ遺跡では、洞くつ内に置かれ、赤色顔料の痕跡があった。時期等は不明である（写真4h、Navarrete, 1967, 1978）。

それ以外に、出土遺跡が判明している太鼓腹石彫は、8遺跡12基である。チアパス州海岸部とされる石彫2基（写真5g, 6b）、トナラ博物館所蔵石彫1基（写真7f）は詳しい出土地点などは不明である。

（４）メソアメリカ南東部太平洋側：グアテマラ

メソアメリカ南東部太平洋側のグアテマラでは39遺跡107基が出土している。しかし、出土

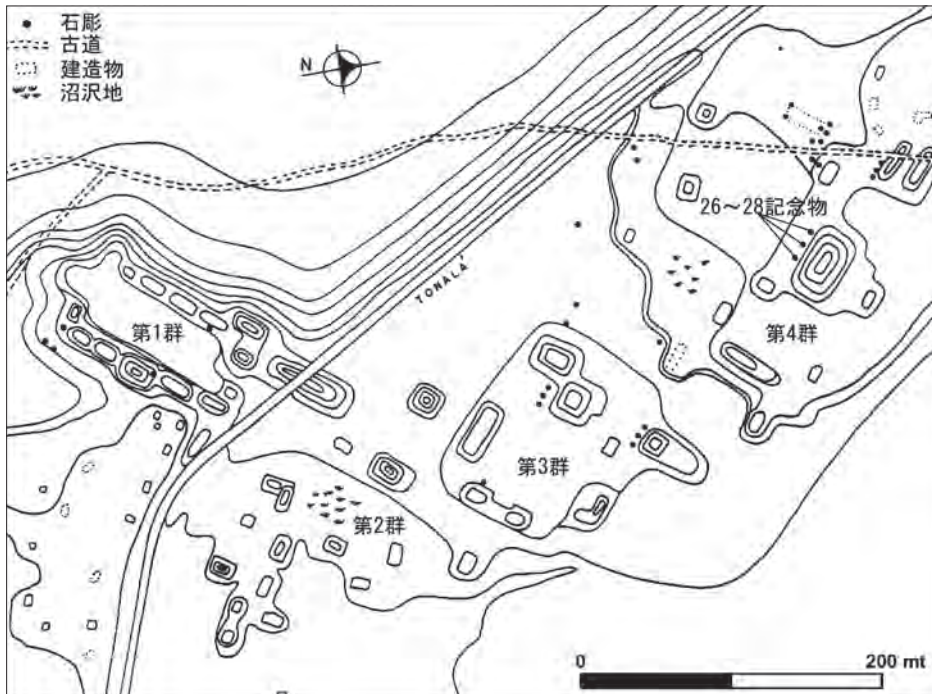


図6 ティルテペック遺跡太鼓腹石彫出土地点図（Navarrete, 2000を改変）

状況が分かる石彫は9遺跡27基である。

サン・ペドロ・サカテペケスでは、イデゴラス・フエンテス将軍が持ち去るまで、先住民が太鼓腹石彫に儀礼を捧げていた（写真5 a、Dutton & Hubbs, 1943）。フィンカ・エル・パライソでも、現代まで太鼓腹石彫に先住民が儀礼を捧げていた（写真4 j、Shook, s.f.）。

タカリク・アバフ遺跡では、太鼓腹石彫7基の出土状況が判明している（図7）。2号記念物は28号建造物近くに位置している（写真9 b、Rodas, 1993）。69号記念物は、未製品と思われるが、12号建造物（先古典期後期）の南側中央に位置している（写真8 b、Orrego, 1990）。94号記念物は、13号建造物（先古典期後期）の北西角近くで他の石彫と共に出土した（写真2 a）。100, 107, 109, 113号記念物は、3号テラス階段前に置かれていた（写真2 i, 4 d, e, 10h）。先古典期後期とされる。また、この階段上にはこの時期の玉座とされる四脚付テーブル状祭壇である30号祭壇が置かれていた（Schieber y Orrego, 2002, 2010）。報告では太鼓腹石彫としている99号記念物は10号建造物の東側正面で出土しているが、太鼓腹部分がなく頭部のみの石彫である。

フィンカ・カタルニャでは、パンパ・ドゥルセ湖北岸から太鼓腹の石彫が出土している（写真8 f、Shook, s.f.）。シュークはサルとしているが、動物というよりは頭飾りを付けたヒトと考えられる。フィンカ・アラビアでは、先住民（キチェ）の聖域に置かれていた（写真6 c、

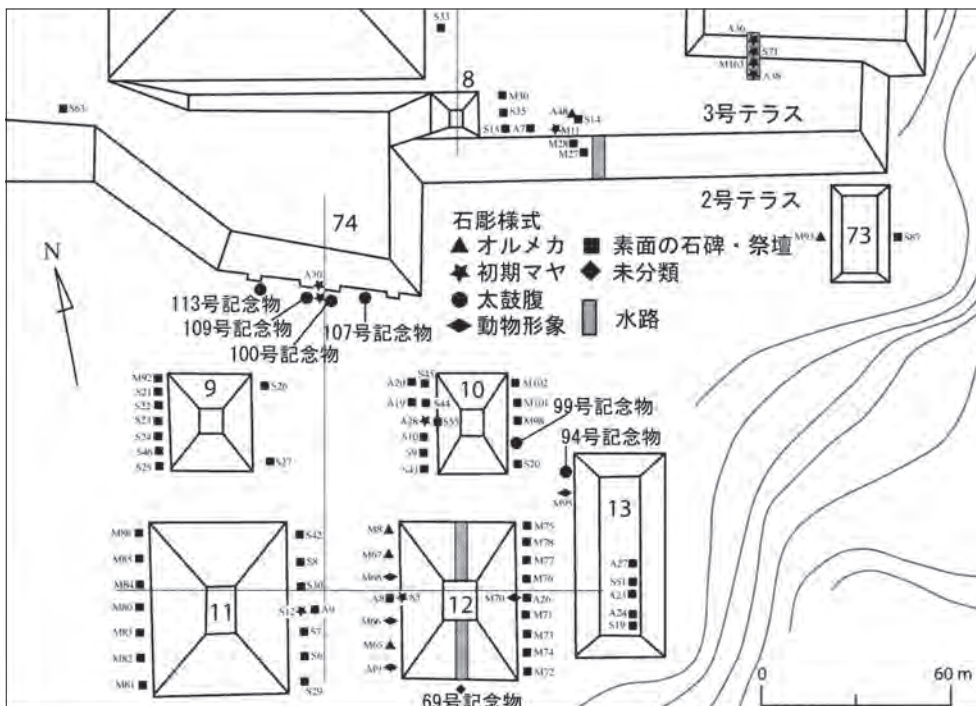


図7 タカリク・アバフ遺跡太鼓腹石彫出土地点図（Schieber y Orrego, 2010を改変）

Shook, s.f.)。

ピルバオ遺跡では、モニュメント・プラザ F14 階段の基部から、顔を下にした状態で 58 号記念物が出土した（写真 2 f）。出土状況から古典期後期と考えられるが、パーソンズは先古典期の石彫の再利用としている。また、彼は 46、47 号記念物もモニュメント・プラザにあった可能性を述べている（図 2 c, d、Parsons, 1967, 1969）。

モンテ・アルト遺跡では、5 基の出土位置が判明している（図 8）。4～6 号記念物は線状に置かれた石彫 5 基のうちの 3 基である（写真 2 b, 3 b, 8 a）。また、9 号記念物は、並べて配置された石彫 4 基のうちの 1 基である（写真 5 c）。11 号記念物は、建造物群から北に少し離れたところに位置する建造物 1 基の南側にあった（写真 3 a）。出土土器などから先古典期後期とされる（Parsons, 1986）。

カミナルフユ遺跡では、7 基の出土位置が分かっている（図 9）。3～5 号記念物が、パラングナ（Lower Plaza）地区から並んで出土した（写真 1 c, 4 a, 7 b; Lothrop, 1926; Parsons, 1986）。パラングナ地区の建造物は古典期後期まで建築活動がみられる（伊藤 2001）。このため、古典期後期以前の可能性がある。6 号記念物はミラフロレス地区の建造物から出土した（写真 1 d、Parsons, 1986）。C-III-1 建造物と関連して、道路工事中に 41 号記念物が出土した（写真 10 c、Rodas, 1993; Parsons, 1986）。また、シュークによればグアテマラ市 9 区から 1 基

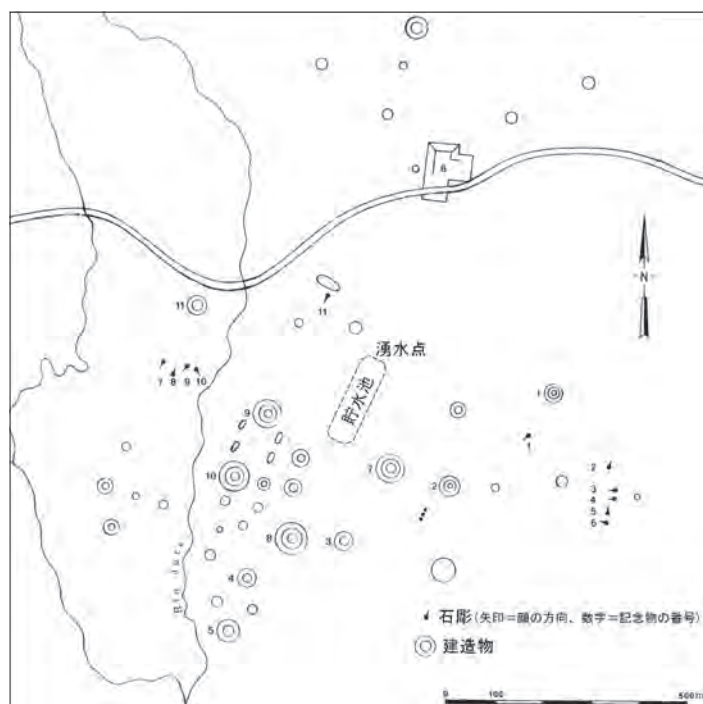


図8 モンテ・アルト遺跡太鼓腹石彫出土地点図（Parsons, 1986 を改変）

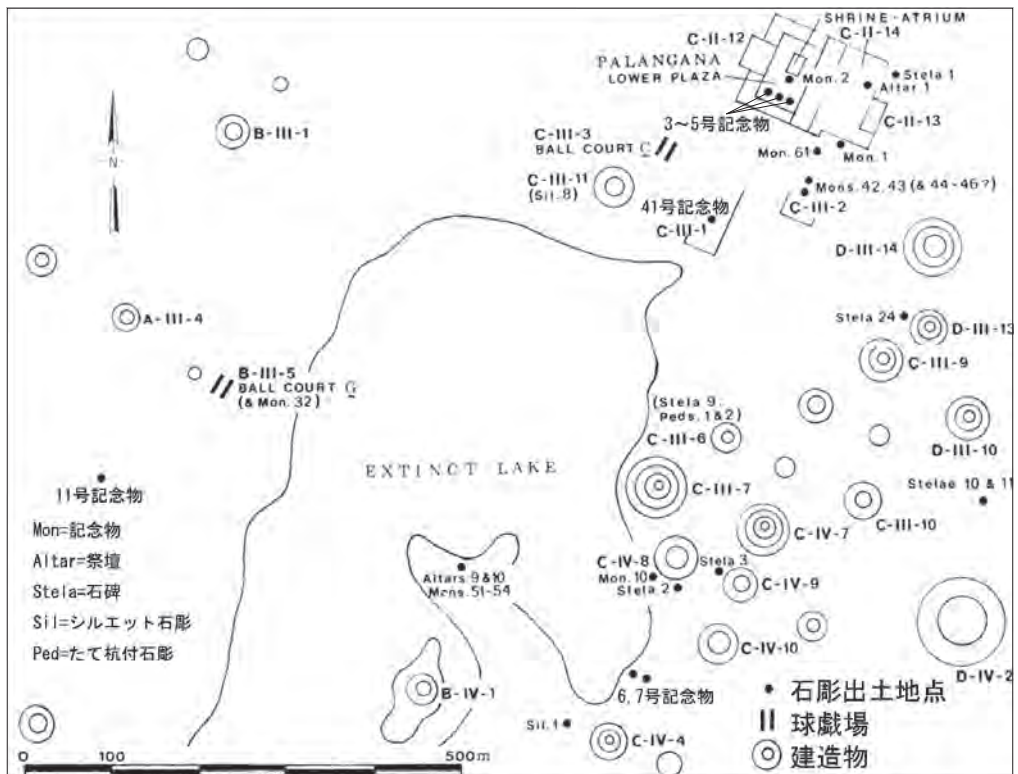


図9 カミナルフユ遺跡太鼓腹石彫出土地点図 (Parsons, 1986を改変)

(写真5h)が出土し、関連して出土した土器は先古典期後期(アレナル期)である(Shook, s.f.)。他の1基は、時期などについては不明であるが、ミラフロレス地区から出土した(写真10g、Shook, s.f.)。

ラ・ヌエバ遺跡では、アクロポリスの中心となる建造物から他の石彫と共に1号記念物が出土した(写真9k)。アクロポリスは、古典期中期～後期につくられているために、調査者は石彫もこの時期と考えている(Estrada, 1999)。

(5) マヤ中部低地：グアテマラ、ホンジュラス

マヤ低地では、4遺跡5基の出土状況が分かっている。

サン・バルトロ遺跡では、太鼓腹石彫1基が原位置から出土している(図4c)。周りの供物と炭素14年代測定から、古典期後期に置かれたとされる。また、この石彫を配置した後に西側に63号建造物が建設された(Craig, 2005)。

チャンチチⅡ遺跡では、先古典期～古典期前期の居住区の建造物から太鼓腹石彫2基が出土した(図4d)。また、報告者は、ラ・トラクトラダ遺跡とエル・ホバル遺跡からも同様の

石彫が出土したとしている（Fialko, 2005）。

ティカル遺跡では、北のアクロポリスの床9の下からの充填材から、82号記念物が出土した（図4b）。先古典期後期（カワック期）に相当する（Coe, 1965; Jones and Satterthwaite, 1982）。また、中心部から3 km 程離れたサンタ・フェ地区では、太鼓腹石彫1基（167号記念物）が盗掘坑からみついている（Rodas, 1993）。

コパン遺跡では、大広場に建立された4号石碑（古典期後期）の基部から、太鼓腹石彫がみついている（図10d、Richarson, 1940）。

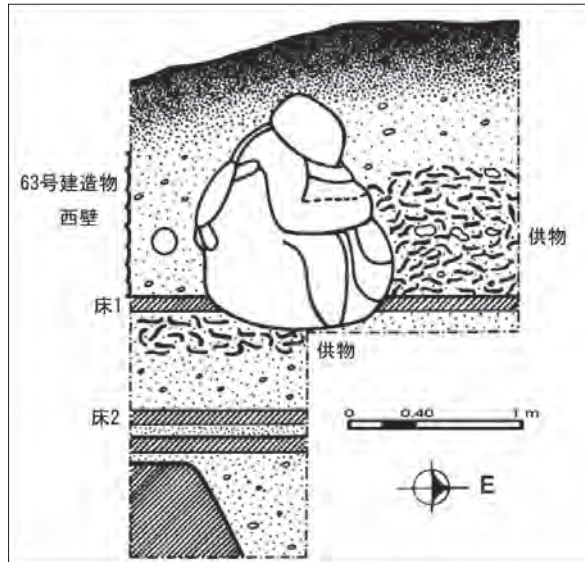


図10 サン・バルトロ遺跡太鼓腹石彫出土状況図
（Craig, 2005を改変）

3. 太鼓腹石彫の各部位の特徴

メソアメリカにおいて、太鼓腹石彫が最も多く出土しているのは、南東部太平洋側である。その中でもグアテマラで最も多く出土している。

頭部では、頭飾りなどの装身具、目や口などが注目される。また、上半身に認められる装身具も検討したい。一方、手をどこに置いているか、そして、手の指の表現に注目する。下半身部分では、褌などの装身具、脚部の姿勢、そして、足の指の表現も検討する。以下では、頭部、上半身部分、下半身部分、衣装・装身具に分けて、太鼓腹石彫の特徴を考察する。

（1）頭部

太鼓腹石彫の特徴とされる目を見る。重く垂れる脛がモンテ・アルト様式の特徴とされるが、チアパス州からグアテマラのメソアメリカ南東部太平洋側に限られ、17遺跡45基が相当する。虚ろな目の太鼓腹石彫は、14遺跡22基である。地域は、メキシコ中央部、メキシコ湾岸、そして、チアパス州からグアテマラのメソアメリカ南東部太平洋側に広がっている。盛り上がり膨らんでいる目は、メキシコ湾岸地方とメソアメリカ南東部太平洋側で、12遺跡17基に表現されている。瞳のない目の太鼓腹石彫は、ノピロア、ポルバレダス、フィンカ・モカ、カミナルフユ遺跡の4基である。

口がほぼ円形若しくは環状になる太鼓腹石彫はメソアメリカ南東部太平洋側に限られ、6遺跡10基である。また、口から舌状のものが垂れているのは、グアテマラのマラカタン、アルヘリア、パサコ遺跡の3基とメキシコ湾岸のセロ・デ・ラス・メサス遺跡の1基である。口を開き、歯を見せているのは、カミナルフユ出土の小型の太鼓腹石彫1基のみである。

(2) 上半身部分

上半身部分では手の位置と手の指部分が特徴的である。手は、殆どが腹に置かれるが、脇腹若しくは胸に置かれる場合もある。しかし、1例のみ後ろ手にされている。手は表現されているが、それぞれの指が分かれていない太鼓腹石彫は、29基ある。指が表現される石彫については、5本指が確実に観察できる石彫は、25遺跡34基ある。5本指ではなく、3若しくは4本の指が表現される石彫は、18遺跡37基ある。臍が表現される石彫は、10遺跡18基ある。円盤状に表現される石彫と臍の穴が表現される石彫がある。

一方、ソチテカトル遺跡とカミナルフユ遺跡の太鼓腹石彫では、胸部に特徴がある。ソチテカトルでは、女性とされる根拠として、胸の隆起部分がある。カミナルフユでは60号記念物にも胸の乳房がある位置に隆起した部分がある。しかし、カミナルフユの他の石彫(写真5h)をみると、女性の胸というよりは相撲力士のように膨らんだ胸部を持つ男性のようでもある。

(3) 下半身部分

下半身部分では、足が表現されていない石彫もある。足の姿勢をみると、胡坐は12遺跡25基ある。11基が右前の胡坐、10基が左前の胡坐である。メキシコ中央部、メキシコ湾岸、メソアメリカ南東部太平洋側に広がり、15遺跡33基の石彫に足を前に投げ出した表現がされている。確実に正座と確認できる石彫は、2遺跡3基の石彫である。しかし、ゲレロ州(1基)、メソアメリカ南東部太平洋側(5基)の太鼓腹石彫は、浸食などによって詳細は不明であるが、正座の可能性はある。体育座りする石彫は、12遺跡18基ある。また、1例は正座若しくは体育座りの可能性がある。立膝立ちの石彫はメソアメリカ南東部太平洋側に1基みられる。立位の石彫は4遺跡5基ある。また、足の指が確認できる石彫は、メソアメリカ南東部太平洋側の4遺跡8基がある。4本の指を表現する石彫と5本指を表現する石彫がある。一方、下半身自体が台座のようにになっている石彫もある。

(4) 衣装・装身具

最初に、頭部の装身具についてみていく。ヘルメット状頭飾りは、ソチテカトル、トナラで見られる。詳細まで表現されているのは、ソチテカトル遺跡の石彫である。トナラのヘルメット状頭飾りは浸食等の影響でお椀状の頭飾り上部しか確認できない。顔全体を覆うようなマスク状頭飾りは、カミナルフユとフィンカ・モカで見られる。前者は目と口を出すのみのマスク

であり、後者は目と口を出し頭頂がやや尖るようなマスクをしている。一方、ビルバオとコンセプションでは、頭頂部にトサカのような部分がある。しかし、頭飾りなのか髪型なのかトサカなのかは判断がつかない。また、メキシコ湾岸地方のセロ・デ・ラス・メサス遺跡では、非常に平たいトサカ状の部分が頭頂部にあるが、ビルバオやコンセプション遺跡で表現されるトサカ状部分と同じなのか頭飾りの一部なのかは不明である。メキシコ湾岸地方では、ノピロア、ポルバレダス、アンティグア遺跡では、頭飾り若しくは髪型と考えられる表現が後頭部にみられる。アパリシオやカミナルフユ遺跡ではやや複雑な頭飾りが表現されているが、共通点はみられない。オブレゴン遺跡等でも頭飾りが観察できるが、その詳細については不明である。耳飾りは、14遺跡27基でみられる。殆どが、平面円形である。アパリシオ遺跡では、円形のものゝ垂飾りが組み合わさった耳飾りを持っている。セロ・デ・ラス・メサス遺跡は頭飾りの一部若しくは耳飾りの可能性がある部分がみられる。

首から下の上半身の装身具について、最も多い事例は首飾りである。20遺跡39基の石彫に首飾りの表現がみられる。カミナルフユ遺跡は石彫15基に首飾りがあるが、大半は幅が広い首飾りである。幅が広く単純な首飾りは、モンテ・アルト、タカリク・アバフ、サン・アントニオ、サン・バルトロ遺跡にみられる。幅広で襷が表現されているのは、マラカタン、ウタトラン、ビルバオ、モンテ・アルト、サン・フアン・サカテペケス、カミナルフユ、コンセプション、サカテペケス遺跡にみられる。襷も単純に上下の彫りこみで表現する場合と襷が三角形状を呈するようにされる場合がある。耳飾りは、メキシコ湾岸からメソアメリカ南東部太平洋側まで円形のものゝ多くみられる。胸飾りは、マンニロ・ファビオ・アルタミラノ、ポルバレダ、ラ・ペルセベランシア、モンテ・アルト、カミナルフユ遺跡の各石彫に表現されている。ナバレテはラ・ペルセベランシアとモンテ・アルト遺跡の凹み部分を同じ胸飾りを表現する可能性を指摘している（Navarrete y Hernández, 2000）。カミナルフユ遺跡の太鼓腹石彫にも凹んだ部分を持つ胸飾りを持つ太鼓腹石彫がある。貫頭衣はカミナルフユで石彫3基にみられる。マントのような衣装は、コパン遺跡で石彫1基にみられる。

下半身部分で、衣装の表現があるのは、フンドシが最も多い。ゲレロ州とメキシコ湾岸地方に多く、メソアメリカ南東部太平洋側ではティルテペック遺跡にみられるが、グアテマラではほとんどみられない。スカート状の衣装を着けている可能性がアグア・エスコンディダ遺跡にはあるが、他にはみられない。カミナルフユ遺跡15号記念物では、足につけられた装身具らしきものがみられる。

4. メソアメリカにおける太鼓腹石彫の特質

メソアメリカにおける太鼓腹の石彫は、メキシコ チアパス州からグアテマラまでのメソアメリカ南東部太平洋側に多くみられる。特に、ティルテペック遺跡、タカリク・アバフ遺跡、

モンテ・アルト遺跡、カミナルフユ遺跡では、複数の太鼓腹石彫が出土している。それぞれの地域の中心となる遺跡で1基のみでなく数基あることは、その地域の政治的勢力とのつながりが強いことを示しているかもしれない。

太鼓腹石彫の先行研究をみると、モンテ・アルト遺跡の太鼓腹石彫を中心にして論じられている (e.g. Guernsey, 2012)。この石彫の特徴は、目を覆うように厚く垂れている臉である。また、抱えるように手を横に添えている大きな太鼓腹、前に投げ出した両足も特徴である。衣装については、大半はなにも着けていない。しかし、胸部や頸部などに飾りを着けた太鼓腹石彫があるが、少数である。

最初に、モンテ・アルト様式太鼓腹石彫の目の部分と比較しながら考察をしていく。モンテ・アルト様式では厚く垂れた臉が特徴とされるが、瞳がない盛りあがった目、抉れて凹んだ虚ろな目を表現している太鼓腹石彫もある。また、太鼓腹石彫以外の石彫をみると、“ヒトの顔が彫られた祭壇”や“横方向にホゾがついた石彫”などでも、厚く垂れた臉を持つ石彫がある (伊藤 1999、2015)。一方、虚ろな目を持つ石彫は、“様式化されたジャガー頭部石彫”などでみられる。これらの目は死を意味していた (伊藤 2016、2017)。

口の部分をみると、ヒトの口とは異なり、ほぼ円形で環状の口を表現している石彫もある。モンテ・アルトの太鼓腹石彫にはみられない特徴である。ティルテベック、イサパ、サン・ファン・サカテペケス、カミナルフユ、パサコなどのメソアメリカ南東部太平洋側の遺跡にみられるが、ティルテベック、パサコ以外は小型の石彫である。一方、口から舌を出している太鼓腹石彫は、メキシコ湾岸のセロ・デ・ラス・メサス、そして、メソアメリカ南東部太平洋側のマラカタン、アルヘリア、パサコ遺跡にある。口からこの舌状のものを出している石彫は、同地方のエルサルバドル西部に分布する“様式化されたジャガー頭部石彫”がある (伊藤 2017)。

太鼓腹石彫は、大半が手を腹に置いている。次に、手を膝の上に置く石彫が多い。また、後方に手を伸ばしている太鼓腹石彫は2基あり、そのうち1基は後ろ手になっている。手の指はあるが、足の指の表現がない太鼓腹石彫がある。しかし、他の石彫では手足の指の細部が表現されている。また、ナバレテもソロマの太鼓腹石彫で指摘している (Navarrete, 1984) ように、必ずしも5本とは限らず、3もしくは4本の表現もみられる。3本指の太鼓腹石彫は、グアテマラ太平洋側のカミナルフユ、ロス・セリトス、チキムリヤ遺跡の小型石彫にみられる。4本指はメキシコ湾岸からメソアメリカ南東部太平洋側にかけてみられる。ソロマ、タカリク・アバフ (107、109号記念物)、ティキサテ、カミナルフユ遺跡 (写真8e) で、腹に手を置き、手首から下をほぼ垂直に下げている。ティキサテの5本指以外では、指の数は3本もしくは4本である。ヒトとは異なる、ヒトを超える聖なる存在を表現している可能性が高い。

足の姿勢は、両足を前に投げ出し座る石彫が33基で最も多く、2番目は胡坐で26基ある。また、両足を投げ出している石彫は地理的にはメソアメリカ南東部太平洋側が最も多いが、メ

キシコ中央部のソチテカトル遺跡の太鼓腹石彫も足を投げ出している。しかし、モンテ・アルト遺跡では足先が上、ソチテカトルでは足先が下を向いている。モンテ・アルトの足は自然であるが、ソチテカトルの足は普通ではありえない方向を向いている。胡坐の姿勢をみると、右足を前にするのは11基、左足が前なのは10基であるが、地域差はない。体育座りになっている太鼓腹石彫は、メキシコ湾岸からメソアメリカ南東部太平洋側に分布し、特にティルテペック遺跡に多くみられる。正座は、確実なのは3基で、その可能性がある石彫は7基ある。メキシコ湾岸からゲレロ州そして、メソアメリカ南東部太平洋側に広がっている。数基の太鼓腹石彫は立位である。立膝立ちしている太鼓腹石彫も1例ある。また、足の指が表現されている石彫は少ないが、イサパ、ウタラン、カミナルフユ、パサコ遺跡にみられる。5本指が普通であるが、4本指はカミナルフユとラ・ヌエバ遺跡でみられる。一方、メソアメリカ南東部太平洋側では、足が表現されない太鼓腹石彫もあり、下半身の表現は重要でなかった。また、性器を表現している太鼓腹石彫はアパリシオ遺跡のみであり、太鼓腹石彫では性器を表現する必要はなかった。

衣装や装身具などが表現される太鼓腹石彫について検討する。ティルテペック遺跡では、モンテ・アルト様式の大きな顔の飾りを持つ頭飾りがある。一方、多くの太鼓腹石彫が出土しグアテマラ高地の中心遺跡であるカミナルフユでは、襷のついた幅広の首飾り、頭飾り、貫頭衣などの装身具を着けている太鼓腹石彫がある。カミナルフユ遺跡に特徴的な襷のある幅広の首飾りは、襷を省略した形のもは他の遺跡にもみられる。タカリク・アバフ遺跡では襷なしの幅広の首飾り、ビルバオとコンセプション遺跡では、三角形を組み合わせた襷をつくっている。こうした三角形の襷の幅広の首飾りは、カミナルフユ遺跡では大きな太鼓腹石彫にはみられないが、小型石彫では表現されている事例が多い。一方、ソチテカトル遺跡では、ヘルメットをかぶった太鼓腹石彫は首から肩にかけての部分が首の周りを巡るように凹んで表現されている。この凹みがメソアメリカ南東部太平洋側の太鼓腹石彫にみられる幅広の首飾りであることも考えられる。

5. 太鼓腹石彫のメソアメリカにおける役割

メキシコからグアテマラ・ホンジュラスまでの太鼓腹石彫の出土状況から、その役割を考察する。

メキシコ ゲレロ州のテオパンティクアニトラン遺跡やメキシコ中央部のソチテカトル遺跡では、遺跡の中心部でなく、少し離れたところで太鼓腹石彫が出土している。一方、メキシコ湾岸地方ではトレス・サポテス遺跡とセロ・デ・ラス・メサス遺跡では、出土状況の詳細は不明であるが、両遺跡の中心部分から出土している。メキシコ中央部とゲレロ州の状況とは異なり、メキシコ湾岸の方が遺跡の中心部に近く、太鼓腹石彫が政治的に重要な位置を占めてい

た。一方、テオパンティクアニトラン遺跡と同じオルメカ文化に属するラ・ベンタ遺跡の巨人人頭像は遺跡の端に位置し、顔が遺跡の外側をみている（伊藤 2011）。これを考慮すると、ソチテカトルでは遺跡の端から太鼓腹石彫が出土しているが、その都市若しくは集落を守るために遺跡の端に配置したとも考えられる。

一方、メソアメリカ南東部太平洋側メキシコ チアパス州をみると、ティルテベック遺跡で太鼓腹石彫が多量に出土した。第4建造物群の最も高い建造物の南正面に26～28号記念物が置かれていた。また、1号記念物も球戯場と思われる建造物の南側に配置されていた。イサパ遺跡では祭壇を伴って、建造物に関連して太鼓腹石彫が出土した。そして、フンカナ遺跡では、洞くつ内から出土した。この地域では儀礼的に重要な場所に太鼓腹石彫は置かれていた。

メソアメリカ南東部太平洋側グアテマラでは、サン・ペドロ・サカテペクス、フィンカ・エル・パライソ、フィンカ・アラビア遺跡で、その聖域に太鼓腹石彫が置かれていた。儀礼の重要な位置を占め、現代まで信仰の対象となっていた。一方、タカリク・アバフ、ビルバオ、モンテ・アルト、カミナルフユ、ラ・ヌエバの各遺跡では、建造物や広場など遺跡内の重要な位置から出土している。政治的に重要な施設に関係が深かった。この地域では、政治の中心部に太鼓腹石彫は置かれていた。そして、現代まで儀礼の中心的役割を担っていた。

マヤ中部低地では、サン・バルトロ、ティカル、コパン遺跡では、石碑や建造物など、政治的に重要な地点から出土している。しかし、チャンチチⅡ遺跡では、居住区から出土した。マヤ中部低地では、政治的に重要であり、一般の人の信仰対象でもあった。

以上のことを考慮すると、太鼓腹石彫は、政治もしくは儀礼的に重要な位置から出土している。当時の社会の祭政両面で、重要な役割を果たしていた。一方で、チャンチチⅡ遺跡の太鼓腹石彫を考慮すると、一般的な人々の信仰も集めていたと考えられる。

6. おわりに

北のメキシコ中央部から南のグアテマラ・ホンジュラスまで、メソアメリカの太鼓腹石彫をみると政治的にも儀礼的にも重要であり、ある地域では一般の人々の信仰を集めていた。そして、グアテマラ高地では、最近まで太鼓腹石彫は先住民の信仰の対象とされてきた。非常に歴史が長い石彫であった。

太鼓腹石彫の個別の要素をみる。三角形の襷がついた幅広の首飾りは、大きな記念碑的な石彫に限ると、グアテマラ太平洋側低地のビルバオ遺跡とコンセプション遺跡のみである。また、小型石彫を含めると、グアテマラ高地まで広がっている。一方、三角形の襷がなく単純な刻み目を付けた幅広の首飾りはカミナルフユを中心として、グアテマラ高地そしてマヤ中部低地に広がっている。時期をみると、三角形の襷がある幅広の首飾りを着けたビルバオ遺跡出土2基は、パーソンズの推定が正しければ、古典期後期である。一方、単純な刻みを入れた

幅広の首飾りを着けたカミナルフユ3号記念物は少なくとも古典期後期にはつくられていた。また、コパン遺跡の古典期後期以前とされる太鼓腹石彫は、単純な刻み目がある幅広の首飾りを着けている。従って、古典期後期に、単純な刻み目の幅広首飾りと三角形の襷がついた幅広の首飾りが共存していた。そして、その分布は、大きな太鼓腹石彫のみに限ると、単純な刻み目の首飾りがマヤ中部低地まで広がり、三角形の襷の首飾りはグアテマラの太平洋側低地のみと範囲は狭い。記念碑的な大きな石彫に表現される装身具の違いが勢力範囲の違いと考えると、カミナルフユ中心の勢力が広範囲に、ビルバオを中心とした勢力は限られた範囲にその影響を及ぼしていた。しかし、小型石彫の分布をみると、三角形の襷を付けた幅広の首飾りはカミナルフユまで広がっている。ビルバオの勢力は、カミナルフユ勢力の範囲まである程度入り込んでいたのであろうか。一方、以前同地域の横位ホゾ付き石彫を論じたことがある。古典期におけるカミナルフユの衰退をコツマルワバ勢力のグアテマラ高地への侵入と関連付けて考えると、説明がつく（伊藤 1999）。一つの仮説として考えたい。

一方、グアテマラで指が4本になる太鼓腹石彫がみられる。また、しばしば手首をほぼ直角に曲げて下ろしている4本指の手もある。太鼓腹石彫は単純にヒトを表現しているのではなく、ヒトとは異なる要素を加えてヒトを超える、聖なる存在としていたことが考えられる。

ここで、エルサルバドル西部の太鼓腹石彫と比較する。脚部が表現されない大半のエルサルバドルの太鼓腹石彫と同じように脚部が表現されない石彫もあるが、多くは脚部を表現している。また、脚部ではなく台座のような表現がエルサルバドル以外ではみられる。一方、膨れた太鼓腹を抱える手についてはエルサルバドルと同様に多くみられる。エルサルバドル以外でみられる臍の表現は、円盤状突起や凹みで表現し、エルサルバドルのような山状の隆起部分となっていない。エルサルバドル西部とそれ以外の地域と比較すると、同じ要素はあるが細部が異なる石彫がある。一方、エルサルバドルの太鼓腹石彫にはみられないトサカ状の頭部の突起が、ビルバオ、コンセプション遺跡でみられる。このトサカ状の突起は、エルサルバドルの“様式化されたジャガー頭部”石彫の特徴でもある。太鼓腹石彫とこの石彫とは何らかの機能の共有があったと考えられる。この形式の石彫であるチャルチュアパ遺跡22号記念物は古典期後期と考えられる層位から出土している（伊藤 2017）。古典期後期におけるエルサルバドルとビルバオ遺跡等が属するグアテマラ太平洋側低地コツマルワバ地域との関係を再考する必要がある。

一方、太鼓腹石彫を個別にみると、メキシコ中央部ソチテカトル遺跡では、太鼓腹石彫の足はつま先が下を向いており、自然な足の状態とは異なる。人を超越する存在としての表現なのか、捕虜として扱われた結果として、若しくは人身犠牲となった人物を表すのであろうか。この1例のみでは判断が難しいが、今後の研究課題としたい。

ところで、カミナルフユ遺跡10号記念物は4面に顔を持つ石彫であり、太鼓腹石彫の顔の特徴を持っている（Navarrete, 1996）。しかし、モンテ・アルト遺跡の垂れ下がった臉ではな

く、目の部分を隆起させている。また、本稿で扱った太鼓腹石彫には隆起させた目の部分や、虚ろな目の石彫もあり、今後、こうした目の表現は何を意味するのかを検討する必要がある。また、口の部分が円環状になる太鼓腹石彫がテワンテペック地峡からエルサルバドルとの国境近くまでのメソアメリカ南東部太平洋側でみられる。こうした口の特徴は、他の地域の考古資料と比較すると、シベ・トテック神と関連があるとされる。また、カミナルフユ遺跡15号記念物は目と口だけを出しているマスクを被っている頭飾りを着けている。こうした表現もシベ・トテックを想起させる。今後、メソアメリカ南東部太平洋側と他の地域との精神文化を比較する必要がある。

また、チンチヤが考えた太った神の祖型としての太鼓腹石彫は、先古典期後期から古典期後期までの系譜を明確にする必要がある。そして、横位ホゾ付き石彫やタテ杭付人頭像などにみられる太鼓腹石彫の顔の意味は、太鼓腹石彫ではその注意が向けられているのが上半身部分であることも関連があると思われる。今後の研究課題として考えたい。

謝辞：この調査の経費は、2017年度科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽）「DNAを文化人類学的視点から読み解く研究」17K18525）の一部が使われました。

参考文献

- Cassier, Jacques y Alain Ichon
1981 “Las Esculturas de Abaj Takalik.” *Anales de la Academia de Geografía e Historia de Guatemala* 55: 23–49.
Chinchilla, Oswaldo
2001–2002 “Los barrigones del sur de Mesoamérica: The Potbellies of Southern Mesoamerica.” *Precolombart* 4(5): 9–23.
Craig, Jessica H.
2005 “Dedicación, terminación y perpetuación: Un santuario Clásico Tardío en San Bartolo, Petén.” En *XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004*, editado por J. P. Laporte, B. Arroyo y H. Mejía, pp. 267–275.
Coe, William R.
1965 “Tikal, Guatemala, and Emergent Maya Civilization.” *Science* 147(3664): 1401–1419.
Delgadillo Torres, Rosalba y Andrés Santana Sandoval
1989 “Dos esculturas Olmecoides en Tlaxcala.” *Arqueología* 1: 53–60.
Dutton, B. and H. R. Hobbs
1943 *Excavations at Tajumulco, Guatemala. Monographs of the School of American Research* 9, Santa Fe.
Estrada Belli, Francisco.
1999 *The Archaeology of Complex Societies in Southeastern Pacific Coastal Guatemala: A Regional GIS Approach*. British Archaeological Reports 820, Oxford.
Fialko, Vilma
2005 “Diez años de investigaciones arqueológicas en la cuenca del río Holmul, región noreste de Petén.” En *XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004*, editado por J. P. Laporte, B. Arroyo y H. Mejía, pp. 244–260.

Girard, Rafael

1969 *La Misteriosa Cultura Olmeca: Últimos Descubrimientos de Esculturas Pre-olmecas en Guatemala*. Empresa Eléctrica de Guatemala, Guatemala.

Graham, John A.

1981 “Abaj Takalik: The Olmec Style and its Antecedents in Pacific Guatemala.” In *Ancient Mesoamerica, Selected Readings*, edited by John A. Graham, pp. 163–176.

Guernsey, Julia

2012 *Sculpture and Social Dynamics in Preclassic Mesoamerica*. Cambridge University Press, Cambridge.

伊藤伸幸

1999 「マヤ南部地域でみられる横方向にホゾが付いた石彫」『名古屋大学文学部研究論集』45(134): 55–94.

2011 「メソアメリカにおける巨石人頭像と大型人頭像」『名古屋大学文学部研究論集』57(170): 65–86.

2015 「メソアメリカ南東部太平洋側のヒトの顔が彫られた祭壇についての一考察」『名古屋大学文学部研究論集』61(182): 91–116.

2016 「様式化したジャガー頭部」石彫について(1)『名古屋大学文学部研究論集』62(185): 101–123.

2017 「様式化したジャガー頭部」石彫について(2) —メソアメリカ南東部太平洋側における意味を考える—『名古屋大学文学部研究論集』63(188): 47–72.

2018 「エルサルドル共和国における太鼓腹の石彫」『名古屋大学人文学研究論集』1: 413–432.

Jones, Christopher and Linton Satterthwaite

1982 *Tikal Report No. 33: A Monuments and Inscriptions of Tikal: The Carved Monuments* University Museum Monographs 44, the University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Love, Michael W.

2010 “Thinking Outside the Plaza: Varieties of Preclassic Sculpture in Pacific Guatemala and Political Significance.” In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*, edited by Julia Guernsey, John E. Clark and Barbara Arroyo, pp. 149–175.

Lowe, G. W., T. A. Lee, Jr., and E. Martinez E.

1982 *Izapa: An Introduction to the Ruins and Monuments*. *Papers of the New World Archaeological Foundation* 31, Brigham Young University, Provo.

Lothrop, Samuel

1926 “Stone Sculptures from the Finca Arevalo, Guatemala.” *Indian Notes* 3(3): 147–171.

Martínez Donjuán, Guadalupe

2010 “Sculpture from Teopantecuanitlan, Guerrero.” In *The Place of Stone Monuments*, edited by Julia Guernsey, John E. Clark and Barbara Arroyo, pp. 55–76.

Navarrete, Carlos

1967 “Notas de la arqueología chiapaneca.” *ICACH* 18: 7–19.

1977 “Aportaciones a la iconografía post-olmeca del Altiplano Central de Guatemala.” *Anales de Antropología* 14: 91–108.

1978 *Un Reconocimiento de la Sierra Madre de Chiapas: Apuntes de un Diario de Campo*. Cuaderno 13, Centro de Estudios Mayas, Universidad Nacional Autónoma de México.

1984 “La estela de Chinautla. Una rectificación y nuevos ejemplos.” *Anales de la Academia de Geografía e Historia de Guatemala* 58: 199–206.

1996 “Esculturas de cuatro rostros del Preclásico superior en el área de Kaminaljuyu, Guatemala.” *Anales de la Academia de Geografía e Historia de Guatemala* 71: 9–27.

Navarrete, Carlos y Rocío Hernández

2000 “Esculturas Preclásicas de obesos en el territorio Mexicano.” En *XIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, pp. 471–500. (versión digital).

Orrego C., M.

1990 *Investigaciones Arqueológicas en Abaj Takalik, El Asintal, Ret albuleu, Año 1988, Reporte No. 1*. Guatemala,

- C.A.
- Parsons, Lee A.
- 1967 *Bilbao, Guatemala* 1. *Publications in Anthropology* 11, Milwaukee Public Museum, Milwaukee.
- 1969 *Bilbao, Guatemala* 2. *Publications in Anthropology* 12, Milwaukee Public Museum, Milwaukee.
- 1981 "Post-Olmec Stone Sculpture: The Olmec-Izapan Transition on the Southern Pacific Coast and Highlands." In *The Olmec and Their Neighbors, Essays in Memory of Matthew Stirling*. Edited by Elizabeth P. Benson, pp. 257–288.
- 1986 *The Origins of Maya Art: Monumental Stone Sculpture of Kaminaljuyu, Guatemala, and the Southern Pacific Coast*. *Studies in Pre-Columbian Art & Archaeology* 28, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington.
- Parsons, Lee & Peter S. Jenson
- 1965 "Boulder Sculpture on the Pacific Coast of Guatemala." *Archaeology* 18 (2): 132–144.
- Richardson, Francis B.
- 1940 "Non-Maya Monumental Sculpture of Central America." In *The Maya and their Neighbors*, edited by C. L. Hay, R. L. Linton, S. K. Lothrop, H. L. Shapiro, and G. C. Valliant, pp. 395–416.
- Popenoe de Hatch, Marion
- 1989 "A seriesation of Monte Alto Sculptures." In *New Frontiers in the Archaeology of the Pacific Coast of Southern Mesoamerica*, edited by Frederick Bove and Lynette Heller, pp. 25–42.
- Rodas, Sergio
- 1993 "Catalogo de Barrigones de Guatemala." *Utz'ib* 1 (5): 1–36.
- Scott, John F.
- 1980 "Post-Olmec Art in Veracruz." In *La Antropología Americanista en la Actualidad*. Homenaje a Rafael Girard, Vol. 1, editado por Francis Polo Sifontes. pp. 235–251.
- 1988 "Potbellies and Fat Gods." *Journal of New World Archaeology* 7 (2/3): 25–36.
- Shieber de Lavarreda, Christa y Miguel Orrego
- 2002 *Abaj Takalik*. Proyecto Nacional Abaj Takalik, Guatemala, CA.
- 2010 "Preclassic Olmec and Maya Monuments and Architecture at Takalik Abaj." In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*, edited by Julia Guernsey, John E. Clark and Barbara Arroyo, pp. 177–205.
- Shook, Edwin. M.
- 1950 "Tiquisate UFers Scoop Archaeological World, Find Ruined City on Farm." *UNIFRUITCO*, August: 62–63.
- s.f. Archivo Edwin M. Shook, ficha de sitio No. 4972, 5067, 5115. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala.
- Stirling, M. W.
- 1943 *Stone Monuments of Southern Mexico*. *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 138, Smithsonian Institution, Washington, D.C.
- Tejeda, A.
- 1947 "Drawings of Tajumulco Sculptures." *Notes on Middle American Archaeology and Ethnology* 77, Division of Historical Research, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.

キーワード：太鼓腹、メソアメリカ、先古典期後期、南東部太平洋側



写真1 垂脛と首飾りを持つ太鼓腹石彫

a. カミナルフユ遺跡 8 号記念物、b. サカテペケス、c. カミナルフユ遺跡 3 号記念物、d. 同遺跡 6 号記念物、e. 同遺跡 57 号記念物、f. 同遺跡 58 号記念物、g. 同遺跡 c 石偶、h. サン・ホアン・サカテペケス遺跡 1 号記念物、i. ラ・デモクラシア、j. カミナルフユ遺跡 b 石偶、k. 同遺跡 a 石偶、l. マラカタン遺跡、m. カミナルフユ遺跡、n. 出土地不明

(i, m, n. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 5476, 4486, 5848. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)



写真2 垂瞼と5本指を持つ太鼓腹石彫

a. タカリク・アバフ遺跡94号記念物、b. モンテ・アルト遺跡5号記念物、c. コンセプション遺跡1号記念物、d. ソロラ遺跡1号記念物、e. 同遺跡3号記念物、f. ビルバオ遺跡58号記念物、g. ヌエバ遺跡1号記念物、h. サン・セバスティアン遺跡6号記念物、i. タカリク・アバフ遺跡107号記念物
(c. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 5467. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)

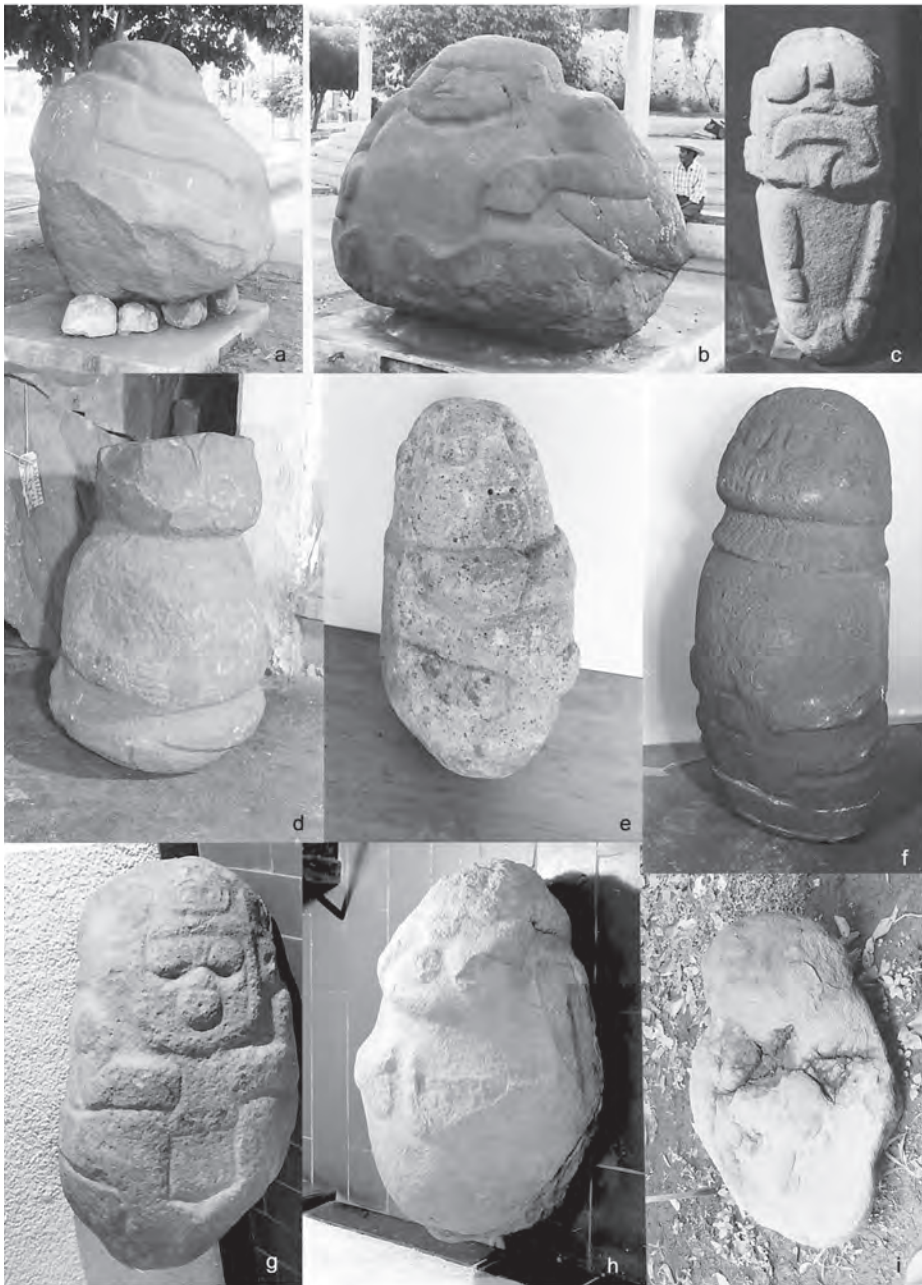


写真3 垂臉をもつ太鼓腹石彫

a. モンテ・アルト遺跡11号記念物、b. 同遺跡4号記念物、c. アルヘリア遺跡、d. パサコ遺跡2号記念物、e. イサパ遺跡、f. パサコ遺跡1号記念物、g. ティルテベック遺跡25号記念物、h. 同遺跡23号記念物、i. サン・セバスティアン遺跡5号記念物

(c. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 4949. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)



写真4 膨れた目を持つ太鼓腹石彫

a. カミナルフユ遺跡4号記念物、b. マンニロ・ファビオ・アルタミラノ遺跡、c. ベラクルス市、d. タカリク・アバフ遺跡100号記念物、e. 同遺跡109号記念物、f, g. ロス・セリトス遺跡、h. フンカナ洞くつ遺跡、i. レタウレウ博物館蔵、j. エル・パライズ遺跡、k. モンテ・アルト遺跡13号記念物
(f, g, j. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 5459, 5460, 4978. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)



写真5 様々な目を持つ太鼓腹石彫

a. サン・ペドロ・サカテベケス遺跡、b. タカリク・アバフ遺跡40号記念物、c. モンテ・アルト遺跡9号記念物、
d. コンセプション遺跡2号記念物、e. サン・セバスティアン遺跡3号記念物、f. サン・ホセ・エル・イドロ遺
跡、g. トナラ博物館蔵、h. カミナルフユ遺跡、i. フィンカ・モカ遺跡

(a, d, i. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 3880, 5463, 4027. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)



写真6 虚ろな目を持つ太鼓腹石彫（メソアメリカ南東部太平洋側、メキシコ中央部）

a. タカリク・アバフ遺跡3号記念物、b. チアパス州海岸部出土、c. フィンカ・アラビア遺跡、d. 出土地不詳、e. カカオアタン遺跡、f. エル・レティロ遺跡、g. ピピヒアパン遺跡、h. カミナルフユ遺跡、i. カミナルフユ遺跡、j, k. ソチテカトル遺跡

(b, d. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 3604, 5812. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)



写真7 虚ろな目を持つ太鼓腹石彫（メソアメリカ南東部太平洋側、メキシコ湾岸）

a. カミナルフュ遺跡15号記念物、b. 同遺跡5号記念物、c. 同遺跡66号記念物、d. 同遺跡60号記念物、e. 同遺跡9号記念物、f. トナラ博物館蔵、g. セロ・デ・ラス・メサス遺跡5号記念物、h. エル・バルサモ遺跡1号記念物、i. アリアガ遺跡

(a, d, i. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 3880, 5463, 4027. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)



写真8 メソアメリカ南東部太平洋側とメキシコ湾岸で出土した太鼓腹石彫

a. モンテ・アルト遺跡6号記念物、b. タカリク・アバフ遺跡69号記念物、c. トレス・サポテス遺跡、d. タカリク・アバフ遺跡8号記念物、e. カミナルフユ遺跡、f. フィンカ・カタルニャ遺跡、g. ノビロア遺跡、h. ポルバレダス遺跡、i. アンティグア村
(c. Stirling, 1943)



写真9 メソアメリカ南東部太平洋側で出土した太鼓腹石彫の破片

a. シン・カベサス遺跡3号記念物、b. タカリク・アバフ遺跡2号記念物、c. ティキサテ遺跡、d. カミナルフユ遺跡59号記念物、e. 同遺跡d石偶、f. パンタレオン遺跡、g. タカリク・アバフ遺跡33号記念物、h. パサコ遺跡3号記念物、i. タカリク・アバフ遺跡46号記念物、j. トゥクストラ・チコ遺跡、k. ラ・ヌエバ遺跡



写真10 メソアメリカ各地方で出土した太鼓腹石彫

a. アグア・エスコンディダ遺跡1号記念物、b. カミナルフユ遺跡11号記念物、c. 同遺跡41号記念物、d. コパン遺跡、e. カミナルフユ遺跡39号記念物、f. 同遺跡7号記念物、g. 同遺跡出土、h. タカリク・アパフ遺跡113号記念物、i. アルバロ・オブregon遺跡、j. オリンボ遺跡、k. アパリシオ遺跡

(a, f. Archivo Edwin M. Shook, foto No. 4021, 4539. Centro Documentación Sociocultural, Centro de Investigaciones Arqueológicas y Antropológicas, Universidad del Valle de Guatemala)

Abstract

La escultura obesa en Mesoamérica

Nobuyuki Ito

En Mesoamérica se han encontrado ejemplos de escultura antropomorfa de apariencia obesa, denominada como Barrigón, Obeso, Gordinflón, Panzudo, Panzón, *Potbelly* entre otros nombres. Esta forma escultórica se distribuye desde la zona de Guerrero, Centro de México y Golfo de México hasta la Costa Sur de Mesoamérica. Se muestra como un estereotipo de esta escultura, en particular las esculturas encontradas en el sitio arqueológico Monte Alto, Guatemala. Las características del rostro y cuerpo del estilo de Monte Alto son párpados cerrados, tronco gordo, en posición sentada, desnudo entre otras características. Por otro lado, existen variedades locales que no se pueden agrupar dentro de un tipo escultórico en piedra. Sin embargo, no tienen el cuerpo hinchado, pero se considera una escultura con el rostro al estilo de Monte Alto y cabe dentro de la categoría de “Barrigón”.

Muy escasas esculturas tienen adornos o alhajas. En la región de Cotzumalhuapa se ha encontrado un collar ancho con pliegue triangular como una ostentación política, mientras que en Kaminaljuyú se ha encontrado una escultura obesa ataviada con un collar ancho con pliegue sencillo. Es así por la diferencia de sus accesorios que se podría distinguir una distribución del poder. Sin embargo, solo en la región de Cotzumalhuapa se encuentra la cresta sagital, que tiene “Cabeza de Jaguar Estilizado” propia de El Salvador. Esto pudo ser un intercambio cultural o político a lo largo de la Costa Sur. También podría considerarse una modificación local, en contraste con un concepto escultórico o simbólico ajeno a su región.

Según el contexto arqueológico, estas esculturas obesas ocupaban un rol importante en la sociedad prehispánica, quizá como guardián, entidad sagrada, entre otros. Cabe destacar, que unas esculturas que tienen barriga prominente, hasta el siglo XX se adoraban como figuras sagradas. Es así como se puede ver la fe profesada hacia la escultura con panza grande o panzón hasta hoy día con un valor espiritual importante en la sociedad viva.

Keywords: Barrigón, Mesoamérica, Preclásico Tardío, Costa Sur